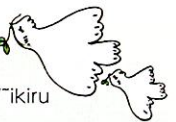


長編ドキュメンタリー映画／SD／カラー／83分

©2011／製作・著作・配給：マザーバード

<http://www.motherbird.net/~ikiru>



撮影・プロデューサー：貞末麻哉子

構成・編集：洪 福貴

制作補：梨木かおり

ナレーター：長谷川初範

もし、私に何かあったら
この子はどうなるの？

【詩人・谷川俊太郎さんからいただいた感想】

これは私的な事実を受け入れ、それを公的な現実になで高めた人々の記録だ。
見終わったあと、まず私の心に湧いたのは、感謝の念だった。
この映画にかかわったすべての人たちへの、
そして<いのち>にひそんでいる限りない力への。

普通に生きる

静岡県富士市にある生活介護事業所でら〜との取り組みを5年にわたって記録したドキュメンタリー映画

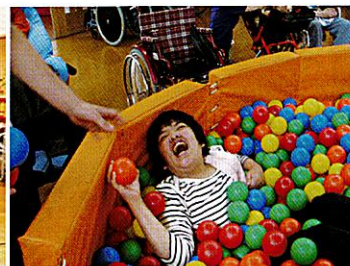


【高橋源一郎さんによる映画評】（2012年1月26日付 朝日新聞 論壇時評より）

この映画は、親たちの「成長」の記録でもある。完成した施設「でら〜と」の所長は述懐する。

「この子は私が見ないと駄目だから…といって困ってしまったんでは、社会も育っていかない。」

体も動かず、ことばも発することのできない心身障害児（者）が、親を動かし、成長させる。そしてその親たちが、鈍感な社会を、また成長させてゆく。常識とは異なり、強い者、大きな者を育てることができるのだ。ほくは、ここに「教育」のもっとも重要な本質、相互性（互いに教え合うこと）を見た。



【制作（特別協力）】ナレーター：長谷川初範／音楽：木 霊／整音・MA：中山隆匡・成ヶ澤 玲／カラスト：稲川実希・太田義則／ポストプロダクション：CSW (Cinema Sound Works)

【制作】撮影・プロデューサー：貞末麻哉子／構成・編集：洪 福貴／制作補：梨木かおり／製作・著作・配給：マザーバード／制作協力：mediaEDIX 【撮影協力】社会福祉法人インクルふじ生活介護事業所 でら〜と 利用者と保護者の皆さん／生活介護事業所 らぼ〜と 利用者と保護者の皆さん／NPO法人くじら 陽だまりの家／静岡県立富士特別支援学校／富士市／富士宮市

普通に生きる

～自立をめざして～

「イントロダクション」

静岡県富士市にある生活介護事業所であらうとは、『どんなに重い障がいがあっても、本人もその家族も、地域の中で普通に生きていける社会をめざす』という理念のもとに親たちの努力で、ゼロから立ち上げた重症心身障害児者のための通所施設である。

ここには医療的ケアを必要とする利用者が多く、生活支援員の他に看護師も常勤し、毎日、それぞれの障害や個性に合わせたプログラムで日中活動を支援している。利用者は多くの人や地域との関わりの中で、社会性を身につけ、誰からも介護を受けられるように成長してゆく。そして親たちも、法制度の改革の波にたちまち行政に働きかけ、自分たちのニーズにあった制度や施設づくりを行い続けてきた。

いずれは、親も子もそれぞれの人生を明るく送れる地域社会づくりを目指して『福祉の受け手から担い手となる』発想が、親たちの新しい未来を切り拓いてきた。

映画は、二つ目の施設建設計画が持ち上がった頃からの五年間を追う。

自分たちが、福祉の受け手から担い手になれるといいと気づいた

市役所がやってくれると
思ってるんじゃないの？

親たちは制度の壁を乗り越えて
新しいサービスを生み出していった



推薦のこづね

神奈川大学特別招聘教授 浅野史郎

障害者のこと、特に、重症心身障害者を知らない人たちに、この映画を見ていただきたい。「障害者はいかにいう「障害者」は家族を不幸にする」「障害者は何もできない」「重度の障害者に自立なんてありえない」といった思い込みがいつか変わってしまわないう。また、地域の中で支援の施設が欲しいと思いつつも、実現の困難さから、あきらめていた障害者の家族にも観てもらいたい。「やればできる」、大きな勇気をもらうはずである。

日常生活のあらゆる面で介助を必要とし、言葉もなく意思表示がむずかしい重症心身障害者が、毎日「であらう」と通ってき、活動の花を咲かせている。仲間や施設職員との関わりの中で示す表情豊かな反応を、この映画は克明に映し出す。密着するカメラは、楽しいことをやっていると彼らの表情を逃さない。これが普通の生活である。これが幸せの形である。見終わって、いろいろなことを感じる。こんな重い障害を持った人たちが、幸せになつてよかったね、ということだけでは終わらない。この映画は、さらにその先の根源的問題、人間とは何か、人生とは、生きるとは、幸せとは何か、地域のかとは何か、家族とは何か、障害者問題を超えて、もっともつと大事なことを教えてくれる。教えてくれるのは、ものも言えない、自分では動けない身体を彼ら重症心身障害者が地域で生きる姿である。そこまで我々を導いてくれる、この映画に乾杯。

社会福祉士 訪問の家事 日浦美智江

かつて障害のある人たちは世間から隠され、座敷牢と呼ばれる部屋に閉じ込められているのが「普通」でした。一九八六年、日本で初めての重症心身障害児者の通所施設「朋」が生まれ、重い障害のある人たちの自己実現の舞台ができた当時は、親はわが子の自己実現に自分の自己実現を重ね、親と子は一心同体というが一般的には「普通」だったと思います。当時の母親たちは七十年代になりました。

で、その母親たちは四十代、五十代です。子どもの自己実現と自分自身の自己実現に胸を張って取り組んでいます。親と子は一心同体ではなく二人の別々の人間であることが「普通」なのです。例えば我が子に重い障害があっても、親自身の自己実現があるのが「普通」なのです。親と子、それぞれの子どもの幸せです。子どもの幸せは親の幸せで、親の幸せは子どもの幸せです。そこにどんな条件が加わろうとそれが「普通に生きる」ことなのだ、それを、見事に見せてくれたで、そのみなさんに、心からの敬意と拍手を送ります。

日本福祉大学准教授 原田正樹

「自立」とは本人の内発的な生きたいという叫びであって、国家が「自立支援」を促すものではないと思う。制度は「生存を保障する」ものであって、「生き方を管理する」ものではない。こう書くに難しい理屈のように受け止められるかも知れないが、映画に登場するところたちの「笑顔」、親たちの「涙」、そして普通に生きようとするそれらの「希望」、そのことを物語ってくれている。そして、この映画が本当にすごいことは、こうしたメッセージを自然に優しく描いていることだ。

■「普通に生きる～自立をめざして～」に描かれた力

生活介護事業所 であらうとらばと所長 小林不二也

足掛け5年にわたって当法人の取り組みを取材していただき、利用者と家族の生の姿を丁寧に撮っていただきました。

人は弱い存在です。しかし、最も弱いはずの重症心身障害児(者)の彼らの笑顔から、実に多くの人々が力をもらっています。

映画は、障害・家族・運動・仲間・人生・夫婦・自立等々、さまざまなことを考えさせてくれる素晴らしい作品に仕上がりました。

不況や災害など生き難い世の中であればこそ、彼らから多くのことを学び、歩んでいくことで社会が成熟していけると確信しています。

ぜひとも、お一人でも多くの人にこの映画を観ていただきたいと思います。明日に向かって力強く生きていく勇気を、彼らからもらってください。そしてその力をあなたの周囲で悩んでいる友人に向けてあげてください。

この映画と、利用者の笑顔にはそんな力があると確信しています。



■生活介護事業所であらうとらばと 社会福祉法人インクルふじとは？

富士市のであらうと(2004年開所)と、富士宮市のらばと(2009年開所)は富士市・富士宮市で暮らす重症心身障害児(者)の親たちで組織した「はなみずき」が、様々な活動の末、地道な活動を続けながら設立した社会福祉法人インクルふじが立ち上げた在宅サービスの拠点である。

インクルふじのホームページ <http://incle.jp>

■マザーバード■

この作品の著作・配給・上映・ご購入に関するお問合せは
TEL & FAX: 03-6913-5591
e-mail: office@motherbird.net

普通に生きる

公式ホームページ
<http://www.motherbird.net/~ikiru>



10月19日(日)13:20～(開場13:00)in 福祉フェスタ2025

会場:二幸産業・NSP健幸福祉プラザ3階 多目的フロア

多摩市南野3-15-1 小田急唐木田駅徒歩8分)

*福祉フェスタ2025【開催時間】10:00～15:00

福祉に関わる団体が多数参加するふくしのお祭りです
団体の発表や体験、福祉団体の自主製品の販売あり

◆入場無料 直接会場へ

企画:多摩社会福祉士会

【問合せ】swtama2021@gmail.com